



# 総合学習フアシリテーター研修

## 地域と学校をつなぐ

今月は、当協会が実施している先導的施策支援事業の助成対象となった地域国際化協会事業のうち、総合学習のための人材育成OJTプログラムを実施した(財)愛知県国際交流協会の試みを紹介する。

(財)愛知県国際交流協会



### 事業の趣旨

総合学習の本格的な導入により、小中学校でさまざまな国際理解教育が行われている。しかし、その多くは「外国人との交流」「外国語の習得」「外国についての学習」の域を出ていないのが実情である。そこからさらに一歩進んで、子どもたちに地球規模の課題を自ら学び、解決する方法を考え、行動する機会を提供すれば、本当の意味での「国際人」育成につながるとともに、総合学習が目指すところの「生きる力」を養うことにもなるのではないだろうか。また、地球規模の課題は地域の課題にもつながっている。国際的な視野で社会を見直すことは、自分の足元の生活を見直すことにもつながる。地域の人材であるボランティアをフアシリテーターとして学校に派遣し、国際理解教育を行うことにより、地域と学校、地域と地球をつなぐことは大きな意義がある。

そうしたことを踏まえて、当協会は、フアシリテーターを育成するためにボランティア



### 研修の目的

この研修の目的は、「①総合学習とは何を指しているのかを理解する。②なぜ参加型で行うのかを理解する。③参加型のさまざまな手法を学ぶ。④プログラムの作り方を学ぶ。⑤フアシリテーターとしてのスキルを磨く。」というものである。

を対象とした「フアシリテーター研修」を実施し、そこで作成したプログラムを活用して小中学校の総合学習の時間にワークショップを行った。



### 研修プログラム

研修の形態もワークショップである。ワークショップは、いろいろな参加者が対等な立場で参加するので、当然意見が対立することもあるが、「対立は悪くない」と考え、どうしたら歩み寄れるか、妥協できるのはどこか…と、建設的に解決していく方法を学ぶ場である。また、「聞いたことは忘れる、見たことは覚えている、体験したことは分かる、

発見したことは使える」という中国のことわざがあるように、参加型の学びは行動につながるができる。参加型学習にも限界はあるが、メリットを認識してそのメリットを最大限に活かすようにした。

この研修では、アイスブレイキングの後、研修生はまず「国際理解教育」とはどのようなテーマを扱う教育なのかについて考えた上で、その後さまざまなプログラムを体験した。国際理解教育とは、地球の課題を扱い、その課題を解決していく力を養う教育であるので、まずは「気づく」ことが大切である。人は普段考えたこともないようなことを問われて考えたり、自分とは異なる意見を聞いたとき「気づく」ことができる。ワークショップの中でそうした問いかけをすることはとても有効であるので、研修の一日目～三日目は、「気づきのプログラム」(「鎖国ゲーム」)、「地球の数字クイズ」などを通して「世界は多様であること」、「どうしたら偏見を持たずにいられるのか」ということなどについて考えた。



↑丸の内中学校のワークショップ

丸の内中学校は、平成一四年一月六日に開催される同校文化発表会のために、生徒の研究をファシリテートするというもので、九月から一〇月に

四日目は「行動へのプログラム」や「問題解決のためのプログラム」「人間コピー機」「貧困の輪」などを体験した。そして「みんな地球規模の課題の一つである「貧困」の解決策一つとつてもさまざまなあるのだ、ということを確認するとともに、異文化と接触したときの不安や対立、自己主張と他者理解がどのように起こるのかを体験し、社会的弱者の立場にいる人々の気持ちについて学んだ。五日目は「傾聴」という聴き方を修得するとともに、「豊かさ」とは何かということについて考えた。ここでは、豊かさの指標はそれぞれであり、物質的な豊かさ以外に精神的な豊かさがあることを忘れてはならない、ということを確認した。

六日目以降の研修では、名古屋市立丸の内中学校の一年生と同市立名城小学校の五・六年生でワークショップを実施した。

かけて七回に分けて行われた。発表のテーマは「世界の子ども、みんな笑顔に！」である。毎回、生徒に当協会の「あいち国際プラザ」に来てもらい、子どもの人権や貧困についてのワークショップを体験してもらった。生徒も最初は緊張していた様子であったが、回数を重ねるにつれ、慣れて積極的に自分の意見を発表するようになった。そして七回のワークショップで学んだことをもとにして文化発表会をした。発表はワークショップを体験して気づいたことを自分の言葉で発表したため、説得力に富んだものであった。また、内容が生徒のアレンジで面白く、分かりやすくなっていたので、終始会場からの笑い声が絶えない楽しい発表となった。

また名城小学校では、五年生には在住外国人の気持ちを理解してもらい、六年生には貧困という地球の課題を考えてもらったが、一〇〇分という短い時間で伝えたいことを伝えるということは非常に難しいことであった。児童には戸惑いも見られたが、ファシリテーターの進行に沿って頑張つて参加してくれた。

ワークショップを終えた研修生は、子どもたちの元気の良さにみんな疲れた様子であったが、それでもやり終えたという充実感が見てとれた。プログラムの実施に当たって、研修生は個別に意見を交換し、子どもたちがよりよく学べるようにミーティングを繰り返し続けた。そのことでファシリテーターとして学ぶことの難しさや喜びを経験できたと思われる。



## 成果と今後の展開

約七時間×一五回という長時間にわたる研修を経て、研修生には国際理解教育の意図、総合学習の目指すもの、ファシリテーターとしての役割、プログラムの作り方などについてじっくり考えてもらえ、実際に活用できるプログラムを作成することもできた。今回は、特に当協会と同一地域の学校である二校に総合学習の時間を提供してもらったが、そのほかにもこれまでに二つの小学校でワークショップを実施したり、この地域で開催された国際理解教育セミナーで研修の成果を発表したりしている。

さらに、今年度は、この研修生が中心となって、新たなファシリテーターボランティアを発掘し、共にスキルアップしながら、地域と学校が一緒に国際理解教育を進めていけるよう研修を開催している。



↑名城小学校のワークショップ